様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19791703
研究課題名（和文） 小児ターミナルケアに携わる若手看護師への教育支援に関する基礎的研究

研究課題名（英文） A Study on Educational Support for Young Nurse Participated in Terminal Care for Children

研究代表者
橋本 浩子（HASHIMOTO HIROKO）
徳島大学・大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・助教
研究者番号：80403682

研究成果の概要（和文）：小児ターミナルケアに携わる若手看護師が感じた困難と対処について明らかにし、若手看護師への教育支援を検討することを目的として、11 名の看護師へ半構成的面接を行い、分析を行った。結果、若手看護師は、母親の存在に萎縮する、ターミナルケアに携わる緊張などの困難を感じていた。これらの困難への対処行動は、同期の看護師や先輩看護師への相談が中心となっていた。小児ターミナルケアに携わる若手看護師には、先輩看護師のモデリングおよび困難を感じた時に相談ができる支援の必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the educational support for young nurse due to clarify the problem in young nurse participated in terminal care for children .We collected the data by semi - structured interview and analyzed qualitatively. Young nurse have experienced some difficulties, such as shrinking to the existence of mother and tension with terminal care for children. These difficulties were mainly coped by consulting to the same year nurse and the senior nurse. We suggest that it is necessary to support by consulting to senior nurse and modeling from senior nurse for young nurse who experienced the difficulties in the case of terminal care for children.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総 計	1,700,000	240,000	1,940,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：小児、ターミナルケア、若手看護師、教育支援

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

1．研究開始当初の背景

小児のターミナルケアに携わる多くの看護師が、子どもと家族への関わりにおいて戸惑いや困難、精神的落ち込みを感じている。看護基礎教育においては、学生が臨床で小児のターミナルケアを学ぶ機会は少なく、多くの場合は就職後に初めて経験しながら学んでいると考えられる。そのため、特に若手看護師は、ターミナル期にある子どもと家族へどのようなケアを行なえばいいのか、戸惑いや困難に直面することも多いと予測される。実際に、新人看護師にとって子どもの死や末期の子どもへの対応はストレスが高いことが報告されている。また、日本においては小児のホスピス、緩和ケアを取り巻く環境は十分とは言えない。そのため、看護師は急性期などの多様な患者とターミナル期にある患者への看護を同時に行わなくてはならず、臨床経験の少ない若手看護師にとってその負担は大きく、さまざまな困難に直面していると考えられる。

新人看護師は、経験ある看護師に比べてストレスに対するコーピング内容が乏しいことが報告されており、ターミナルケアに携わる若手看護師が、ストレスや疲労を蓄積して疲弊し、ケアに消極的になってしまわないように支援は必要である。しかし、これまでの小児のターミナルケアに携わる看護師に関する研究では、臨床経験が３～５年目以上や小児看護のエキスパートと呼ばれるような看護師が対象となっている研究が多い。

ターミナルケアに携わる看護師を支援することは、子どもと家族へのケアの質の向上にもつながると考えられる。そのためには、まず、若手看護師が小児のターミナルケアにおいて、どのような困難を感じてどう対処しているのか、その現状を明らかにする必要がある。

2．研究の目的

小児のターミナルケアに携わる若手看護師への教育支援を検討する基礎的資料とするために、若手看護師が感じた困難の内容やその対処を明らかにする。

3．研究の方法

(1) 研究協力者

小児のターミナルケアに携わる臨床経験 2 年未満の看護師（以下、小児若手看護師とする）、小児のターミナルケアに携わる小児専門看護師および臨床経験 5 年以上でそのうち小児看護臨床経験が 3 年以上の看護師（以下、小児の経験豊富な看護師とする）、成人のターミナルケアに携わる臨床経験 2 年未満の看護師（以下、成人若手看護師とする）とした。

(2) データ収集方法と収集期間

小児専門看護師への研究依頼は、日本看護協会ホームページに掲載されている内容に基づいて、各個人の勤務先へ研究協力依頼の文書を送付し、研究協力の可否について研究者へ返信をしてもらった。この他の協力者への研究依頼は、対象施設の看護部長へ依頼を行い、該当部署の師長を通じて本研究の条件に該当する看護師へ研究協力依頼文書を渡してもらい、研究協力の可否については個別に研究者へ返信をしてもらった。

データ収集は、プライバシーが確保できる場所で半構成的面接法を用いて行った。調査を実施するに先立ち面接内容を検討するために、まず文献検討を行い国内外の先行研究よりこれまでの小児ターミナルケアにおける看護師に関する研究状況について把握した。この結果を参考に、ターミナルケアにおいて看護師が困難と感じた状況、そしてそれ

に対してどのように考えて行動をしたのか対処とその結果について、詳細に明らかにできるように面接ガイドを作成した。インタビュー内容は、ターミナル期にある子どもと家族への看護を行うなかで、「困難さを感じた内容、状況」、「どのような点で困難さを感じたのか」、「その困難に対してどのように対処をしたのか」である。面接は1回で、時間は60分程度とした。面接内容は、協力者の了解を得て録音を行った。データ収集の期間は2008年3月～2008年11月とした。

(3) データ分析方法

録音した内容から逐語録を作成し、内容を精読した。まず、個別の分析を行った後に、小児若手看護師、小児の経験豊富な看護師、成人若手看護師それぞれのグループについての分析を行った。看護師がターミナルケアにおいて感じた困難とその対処について語られている部分に焦点をあて、コード化して、内容の類似性と相違性について繰り返し検討しサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。次に、抽出された内容について、この3つのグループにおける類似性と相違性に関して比較、検討を行った。分析に際しては、小児看護学研究者からのスーパーバイズを受け、妥当性の確保に努めた。

(4) 倫理的配慮

協力者へは、研究目的、方法、研究協力への任意性及び中断の自由、結果の公表について、文書と口頭で説明を行い同意を得た。本研究は、A病院看護部臨床研究審査委員会の承認を得た。

4．研究成果

協力者は、小児若手看護師が3名、小児の経験豊富な看護師が5名、成人若手看護師が3名の合計11名であった。

文中の【　】はカテゴリー、《　》はサブカテゴリーを表す。

(1) 看護師が感じた困難の内容

小児のターミナルケアに携わる若手看護師が感じた困難として、【どうしていいか分らない】、【母親の存在に萎縮する】、【自信がなく不安】、【ターミナルケアに携わる緊張】、【予後不良の子どもをみる辛さ】、【時間がない】という6つのカテゴリーが抽出された。小児の若手看護師は、【自信がなく不安】な気持ちや【予後不良の子どもをみる辛さ】を抱えて、業務に精一杯で【時間がない】なかで、《どのように言葉をかけたらいいか》、《子どもの身体症状にどう援助したらいいか》、《家族へどのように援助したらいいか》という【どうしていいか分らない】状況に直面していた。また一方で、【自信がなく不安】な気持ちは、【母親の存在に萎縮】することにもつながっていた。そして、看護師が【どうしていいか分らない】、【予後不良の子どもをみる辛さ】、【母親の存在に萎縮】する結果、【ターミナルケアに携わる緊張】を生じていた。

小児のターミナルケアに携わる経験豊富な看護師が感じた困難として、【家族を支えていく援助の難しさ】、【子どもの気持ちを引き出す援助の難しさ】、【予後不良の子どもをみる辛さ】、【医療チームの連携のための調整の難しさ】、【時間がない】という5つのカテゴリーが抽出された。小児の経験豊富な看護師は、【予後不良の子どもをみる辛さ】を抱えながらも、子どもや家族に対して精神的援助に取り組み、そのなかで、【家族を支えていく援助の難しさ】や【子どもの気持ちを引き出す援助の難しさ】を感じていた。また、多職種で協働して子どもと家族を支えていくための【医療チームの連携のための調整の難しさ】や、煩雑で多忙な業務のなかでゆっくりと子どもと家族に関わる【時間がない】というジレンマに直面していた。

成人のターミナルケアに携わる若手看護師が感じた困難として、【どうしていいか分からない】、【予後不良の患者をみる辛さ】、【ターミナルケアに携わる疲労】、【自信がなく不安】、【時間がない】、【医師との連携の難しさ】とい 6 つのカテゴリーが抽出された。成人若手看護師は、【自信がなく不安】な気持ちや【予後不良の患者をみる辛さ】を抱えて、業務に精一杯で【時間がない】なかで、【どうしていいか分らない】状況に直面していた。そして、【どうしていいか分らない】状況や【予後不良の患者をみる辛さ】、さらに【医師との連携の難しさ】は、看護師に【ターミナルケアに携わる疲労】をもたらしていた。

小児の若手および経験豊富な看護師、成人若手看護師の困難の内容に関して、比較、検討を行った。その結果、小児のターミナルケアに携わる若手看護師が感じている困難は、【予後不良の子ども（患者）をみる辛さ】、【時間がない】というターミナルケアに携わる看護師に共通した内容に加えて、【どうしていいか分からない】、【自信がなく不安】という若手看護師に共通した内容、さらに、【母親の存在に萎縮する】、【ターミナルケアに携わる緊張】という小児の若手看護師のみに抽出された内容によって構成されていた。

（2）困難への対処

小児のターミナルケアに携わる若手看護師が困難を感じた時の対処としては、【同期の看護師に相談する】、【少し引いた関わり】、【前向きな気持ちへと変化】、【先輩看護師に相談する】、【分からないけど尋ねにくい】、【先輩看護師の実践を参考にする】、【子どもを通して母親へ関わる】、【黙って寄り添う】、【医師に相談する】の９つのカテゴリーが抽出された。

小児の若手看護師は、【同期の看護師に相談する】ことで精神的に支えられていて、【先輩看護師に相談する】、【医師に相談する】、【先輩看護師の実践を参考にする】ことで、困難に対しての解決の手がかりを得ていた。また、【子どもを通して母親へ関わる】、【黙って寄り添う】という関わりも行っていた。そして、このような対処によって、【前向きな気持ちへと変化】していた。しかし、その一方で、【少し引いた関わり】、【分からないけど尋ねにくい】という対処も行われていた。

ターミナルケアに携わる看護師の困難への対処行動として、相談することは、小児の若手および経験豊富な看護師、成人の若手看護師にも共通していた。しかしながら、相談を行う対象については、若手看護師の場合には同期の看護師や先輩看護師、医師であったのに対して、経験豊富な看護師は、同僚の看護師や他の専門職など、その対象は多様であった。また、小児および成人の若手看護師には、【分からないけど尋ねにくい】という対処が共通して抽出された。

(3) 看護への示唆

小児ターミナルケアに携わる若手看護師は、【母親の存在に萎縮する】、【ターミナルケアに携わる緊張】、【どうしていいか分からない】、【自信がなく不安】、【予後不良の子どもをみる辛さ】、【時間がない】という困難を感じていた。若手看護師が直面している、ベッドサイドに行ってどうしたらいいのか、特に小児の場合、母親とはどうやって関わっていけばいいのか、という状況は非常に切実と思われる。このような困難を抱える若手看護師にとって、実際に先輩看護師の関わりを目で見て耳で聞くことができれば、それは明日からの自分の実践に活用できる非常に貴重な経験であり、有用と考えられる。先輩看護師から判断や行動の意味を学ぶことは、若手看護師にとって自分にはなかった新しい視

点を得ることができ、若手看護師が母親への援助へと一歩踏み出すことができる糸口ともなると期待される。しかし、新卒看護師の60%以上が6月までには正規の夜勤要員となっていて、プリセプター約60%は臨床経験が3年未満である状況を考えると、経験豊富な先輩看護師の実践を一緒にベッドサイドに行って直接的に学ぶ機会は、多くはないのではないかと考えられる。したがって、若手看護師に対しては、経験を積み重ねた先輩看護師のモデリングが有用であり、支援として検討する必要があると考える。

ただ、若手看護師にとってターミナルケアで直面する困難は言語化することが難しく、分からないけど尋ねにくいこともあって、先輩看護師にサポートを求めにくいことも予測される。また、看護師が子どもの死をどのように認識するかは、ターミナルケアに携わっていくうえで重要であるが、看護経験年数が3年未満では、子どもの死にショックを感じて戸惑いや感情の揺れが大きい傾向にある。したがって、ターミナルケアに携わる若手看護師には、心の支えでもある同期の看護師の存在に加えて、困難を感じた時には抱え込まずに安心して相談出来るような態勢、そして、先輩看護師のモデリングを通してターミナルケアで感じた様々な困難を今後の実践につなげていけるような支援が必要と考える。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

<u>橋本　浩子</u>、小児ターミナルケアに携わる若手看護師への教育支援に関する基礎的研究、第7回日本小児がん看護学会、2009年11月28日、千葉県.

6．研究組織

1)研究代表者

橋本　浩子（HASHIMOTO　HIROKO）

徳島大学・大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・助教

研究者番号：80403682

2)研究分担者

なし

3)連携研究者

なし